

G-7 生業様々

858. カキリマ/屋台

インドネシアに限らず、東南アジアには屋台の食べ物屋が多い。屋台の店のことをインドネシア語で「ワルン(warung)」または「カキリマ(kakilima)」という。ワルンは定着型であり、カキリマは移動型である。



ジャカルタ・クウィタンにて
2001/8/26 編者撮影

俗称のカキリマの直訳は①五本足、②5フィート、③五歩、の意味で屋台のいろいろな特徴を捕えている。①は屋台の二輪とストッパーと店主の二本足の合計で五本足になる。②は屋台の大きさがせいぜい5フィート(1.5m)である。③は屋台の営業場所が家の入口から5歩程度ということで田舎の道路で見かける風景である。シンガポールでは店の前に屋根付きの五歩幅の歩道の設置を義務付けたことから歩道がカキリマといわれ、そこで営業する路傍商人を“カキリマ商人”と称したのが東南アジアにひろがったという。

日本の祭りの屋台と同じで商品は玩具や雑貨など何であってもよいわけであるが、焼きとうもろこし、落花生、バナナの葉に包んだチマキのような菓子など飲食関係の店が一番多い。テイクアウトが普通であるが、屋台の周りに長椅子がおいてあってそこで食べることもできる。



ジャカルタ・クウィタンにて
2001/8/26 編者撮影

インドネシアに食べ物の屋台が多いのは、庶民の家に炊事設備も整っておらず家で料理することが少ない。初めから外食をあてにしている。東南アジア全般に中国料理の影響で焼き蕎麦や焼き飯が好まれる。これらの調理には強い火力が要るが一般家庭ではそのような調理具はない。このようなことでカキリマの看板には【MI-GORENG】(ミーゴレン=焼き蕎麦)がよく目立つ。屋台では食事専門、持ち帰りの単品専門など多岐多様である。また値段も競争の原理で経済的である。

屋台による外食はインドネシア人が生活に余裕があるということではなく、むしろ貧しいからである。なんとすれば女性も収入を得るために何らかの仕事に就かねばならないので家事の時間はない。その結果、屋台での外食を余儀なくされる。暑いので作り置きができないという事情もあろう。

屋台の店主からレストランのオーナーになった例もないことはない。しかし一般には屋台は貧しい人が貧しい人を相手に必死に生きている生計の手段である。農村の貧困から食えないで都会へ出てきた農民の出稼ぎ仕事で最も手取り早い仕事はベチャ引きであり、天秤一本の露天商である。屋台の店主も同じようなインフォーマル・セクター(→729)部門である。インドネシアの現状では屋台は生存権に係わる根が深い社会問題である。

屋台の存在は都市の美観を損ねる、交通妨害になる、ということで追放の声もあるが、東南アジアの文化としての評価もされている。シンガポールでは屋台の営業場所を集約して名所にしている。日本でも博多では

屋台に地域振興を賭けている。

859. ベチャ引き

ベチャがインドネシアの日常光景であることから誰にでも知られている職業として、社会的位置付けにおいて最下等クラスにランクされるのがベチャ引きである。小説を読んでいると行き詰まった際に「ベチャでも引くか」という自問自答の決意が人生の転機になっている。

ベチャを引く(実際はこぐ)には体力さえあればよいが、汗をかいて働く故に見下される。悪辣な雲助タクシー(→842)と比べるとベチャ引きは朴訥な田舎のおっちゃんであることが多く、日本の若者の旅行記にも親切的なベチャ曳きの話が結構多い。

ベチャを引く人はベチャを所有する資力のない者がほとんどである。このような者に対して日銭で貸して商売にするベチャの親分がいる。一台を一日 2~3 回貸し出し、貸し賃は毎日の稼ぎから徴収する。待機場所にも良し悪しがあるので親分が公平になるよう取り仕切るらしい。

農村から都市へ流出した人口は都市のカンプン(→728)と言うスラムに滞留する。これらの人の最も容易な生活手段はベチャ引きである。三輪の自転車であるから特殊技能は必要としない。道順は客が言うから地理に通じる必要はない。都市近辺の農村からの農民の出稼ぎのため農閑期には都会のベチャが増える。

自動車交通の障害になるということでベチャは当局からは目の敵にされてきた。禁止してもすぐに現れる。没収という強硬手段も講じてきた。交通渋滞の解消以外に都市の秩序、清潔、安全、観光客誘致がその規制の大義名分である。1990 年にジャカルタ全市からベチャは追放された。他の大都市でもベチャは表通りでの営業を規制されている。

首都ジャカルタでベチャを見かけることがなくなったが、地方へ分散しただけでインドネシアでは健在である。一度はジャカルタから完全に締め出されたベチャであるが、1997 年の金融危機に伴う不況で失業者対策として復活が黙認された。噂を聞いた失業者がベチャをもってジャカルタに押しかけたので当局は慌てた。

買い物帰りの普通のオバサンがベチャに乗っている。日中に歩かないことが中流階級であることの見栄である。栄養の足りなさそうな小さな男が懸命にこいでいる。汚れたシャツと半ズボンからの手足は日に焼け、汗で黒光りしている。それを冷房のきいた自動車から見ている人がいる。ちょっとしたアジアの縮図である。



ジャカルタ・ポンドックラブにて
2000/8/04 撮影

木陰で客まちのベチャの座席で運転手が昼寝している。怠けているのではない。狭い家では寝る場所も不自由である、その上、大抵は口うるさい女房がいる。男は屋外で睡眠をとっているだけである。この辺は『ベチャ引き家族の物語』という真面目な社会学者の著書の抜き書きである。念のため。

足揚げて人力車夫の大昼寝 北端辰昭著「潜水」より

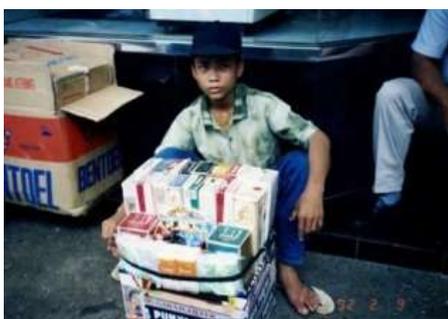
⇒839.ベチャ/輪タク

860. 街頭のものうり

都市のカンプン(→728)に住む人々は貧しい。子供も家計を助けなければならない。そのためもつとも手っ取り早いのは街頭のものうりである。ジャカルタの都心の幹線道路で交通信号で車が止ると周りから車道へ子供が現われる。新聞、雑誌、煙草、水、菓子を手にして車の間を素早く通り抜けていく。辞書や地球儀の売り子さえ現れる。

「コーラン」「コーラン」と叫んでいる。イスラム教国であるから經典のコーラン¹の販売と思うのは早とちりである。インドネシア語のコーランは「新聞」のことである。

信号で停まった前のトラックの運転手が煙草を買っている。二本の煙草と小銭のやりとりが見える。二箱ではない、わずかに二本の煙草である。これでも吸殻を拾う人から比べると裕福な人であろう。



ジャカルタ・ブロック M にて
1992/2/09 撮影

ものうりの子供は車の中の運転手や乗客の顔をのぞき込んでいく、年頃は小学生、中学生というところであろうか。それほど売れている様子もないが、くったくなさそうである。やがて信号が替るギリギリのタイミングに車道から引き上げる。冷房車は窓を閉めたままである、ガラス一枚の内と外は別世界である。

彼らは信号が変わるまでねばっている。彼らに付き合いがきりがないので自分なりのルールに従うことである。断る際に日本人は手を振るが、インドネシアで手を振ることはアッチへ行けという意味で角が立つらしい。掌を示すのが丁寧な断り方である。

物売りには信号で停車中の車を拭くサービスもある。頼みもしないのに勝手に車を拭き料金を請求する。ここで支払をためらうと車に傷をつけられる可能性もある。

小銭の持ち合わせがなくて高額紙幣を出してもお釣りはかえってこない。インドネシアでは 900 ルピアの料金に 1000 ルピア札を出してお釣りを要求するのは金持ちの品格にかかわるということを銘記すべきであろう。

ただ単なる物乞いもいる。「ミンタ・ウアン(minta uang)お金を下さい」が常套文句なので「ミンタ」という。路上で生活する子供を「アナック・ジャラナン(anak jalanan)」という。ストリート・チルドレンのインドネシア語である。ミンタもアナック・ジャラナンも経済危機の前からいたが、経済危機後さらに多くなった。ストリート・チルドレンを描いた映画にクリスティン・ハキム(→994)の『枕の上の葉』がある。

ジャカルタではこの街頭のものうりの規制が話題になる。当局は交通渋滞の原因がこのものうりにあり、ものうりを排除すれば車の流れがよくなると考えている。

といっても生活がかかっているから当局のお触れくらいでもものうりも商売を止めるわけにはいかない。そこで現実的解決は当局のお声がかりで組合を組織してその加盟者にだけものうりを認める方法である。このようにすれば見苦しくない程度に売り子の数を制限することができる。組合の加盟者は小奇麗なユニホームを着用して営業することになった。「希望に満ちた明日」というのがその組合の神妙な名前である。しばらくは続いたが、そのうちやむやになり元の木阿弥というのがインドネシアである。

¹ <編者註>イスラムの聖典はアル・クルアーン、キリスト教の聖書はアル・キタブと呼ぶ。聖書がなぜアラビア語でよばれているのかは不明。

861. 観光地のものうり

バリ島やジョグジャカルタやトバ湖のような外国人観光客の多い観光地には大勢の土産物うりがいる。通常の店舗を構えた土産物屋ばかりではない。手に商品を持って観光客にしつこくついてまわる。

彼らには客がどの国から来たかを素早く見分ける特殊技能があるらしい。日本人と見ると「1万ルピア(約700円)！」と日本語で価格の提示がある。そ知らぬ顔して通り過ぎると「ケチ！」と日本語を浴びせられる。

付きまとう売り子から逃れるつもりで「1千ルピア」といって逃げたつもりであっても、先方にとっては商談の始まりである。先方から「8千」と価格の再提示がおこなわれると、ついこちらに乗せられて「2千」と応え、再び先方「7千」、こちら「3千」という経過の後、気がつくとも5千ルピアの買い物をしている。

バスが目的地に着いた時、熱心なものうりの群れを見ると車を降りるのもためらわれるほどである。彼らにもルールがあるようで決してバスの中には入らない。しかし、バスの外でも商売はできる。窓を指でノックして乗客に品物を見せている。

中には面白そうな品物もあり少しでも見つめると、こちらの目の動きを素早く読み取った売り子は執拗に食い下がり、指で値段を提示してくる。面倒であれば目が合わないようにしているに限るが、目のやり場に困る。

買わされる羽目になってもけっして高くはないが、安物をつかまされることが多い。何れにしても買い物は一種のゲームである。これに対してバス会社が連れていく一流商店は品物は確かであり若干の値引きはあるにしても非常に高価であるのはバス会社へのリベートも含んでいるのだろう。

売り子は女性が多いが中には子供もいる。トバ湖の乗船場で人から離れた所で3~4歳と思われる女の子が土産物らしきものを差し出すので触れてみる。こんな子供も商売をしているがお金はどうするのだろうか少し迷っていると何処からか姉とおぼしき10歳くらいの女の子が現われて「千ルピア」と毅然として日本語で断言する。

日本であればアイスクリームを嘗めて人形遊びをしている年頃と思われる姉妹である。インドネシアでは観光客を厳しくにらみつける姉の目はその子が家計を背負っている気迫が見られ、もはや突き返したり、値切ることは不可能な状況に追い込まれた。あの女の子はバタック人(→607)であったのであろうか。

バリ島では観光地の寺院を出てバスの乗り場までの通路は小さな土産物屋の櫛比する一角を通る仕組みになっている。路上のもの売りほどではないが熱心に呼び込む様を見るとインドネシア人は働き者であると思う。

バトゥル山(→182)に登るとジュースを持った少年が山登りにどこまでもついてくるのを見れば根負けして欲しくなくても買わざるをえなくなる話を椎名誠が『バリ島横恋慕』で語っている。インドネシアでは大人も子供も一生懸命に生きている。

862. 天秤棒一本

日本でも夜鳴き蕎麦や焼き芋の屋台は現在もある。時たま流し屋台の呼び声は日本の貧しかった頃を偲ばせる風物詩である。納豆や豆腐売りも比較的最近まで残っていた。日本の初夏を彩った金魚売りの「キンギョーヘーキンギョ」の涼しげな呼び声は今や江戸落語の世界になった。最近、東京の住宅街で竿屋の行商を見た時は空き巢ねらいの下調べでないかと思ったほど違和感があった。

インドネシアではあらゆる商品を行商から求めることができる。行商で売られていないものはないからわざわざ出かけて買いに行く必要性がない。

ものうりの商品別の独特のよび声は現在の生活の中の風景である。呼び声でなく鍋や茶碗、木魚など音のでる鳴り物を使用する。販売商品ごと決まった音がある。例えばバソ屋は茶碗を叩く。豆腐屋(→768)は木魚の音である。カンブン(→728)の人は声と音の微妙な差で商品聞き分ける。サテ屋(→766)の甲高い声は「テー」「テー」としか聞こえない。マドゥラのサテ売りは七輪を担いでおり、注文があればその場で焼いてくれる。

最も多いのが食べ物である。ご飯、パン、麺類などすぐに食べられるもの、各種惣菜もありガドガド(→766)など一品に特化しているものもある。

特定の品物は時間帯が決まっている。パンは朝食時である。日中になると果物、飲み物、氷菓子、アイスクリーム屋が現れる。クルプック(→767)という煎餅や饅頭などのおやつも売りに来る。

食べ物以外の生活用品では灯油、薪炭に、竹編み壁などの住宅資材もある。灯油を纏め買いのできない庶民はコップ一杯と当日分だけの量を買う。鍋、釜の台所用品に、鳥や金魚など行商の商品にないものはない。風船、人形、笛などの玩具は廃物をうまく利用したものである。わら灰も洗剤代わり商品になる。物品の販売だけでなくマッサージや床屋も回ってくる。プガメン(後述 865)という流し歌手、音楽の演奏や猿回し、蛇使いも住宅街を訪れる。靴、カバン、傘、自転車の修理もある。

練り歩く手段は屋台やリヤカー、あるいは自転車もあるが、最も簡単で最小資本の商売道具は「ピ克蘭(pikulan)」という天秤棒である。ピ克蘭出身とは裸一貫からの成り上がりの成功者をいう。

特定の商品が特定の地域出身者に限られるものがある。ジャカルタではタシクマラヤのクルプック、マドゥラのサテなどが有名である。健康栄養ドリンクであるジャムウ売り(次項)はソロ出身の女性である。

ウジュン・パンダン(マカッサル)での例であるが、民族別の職種の例の記載があったので記しておく。トラジャ人(→618)=靴修理・大工、マカッサル人(→616)=ベチャ屋、バンジャル人(→192)=裁縫師、ジャワ人=氷売り・ラーメン屋、マドゥラ人(→614)=床屋である。

行商人はその日暮しである。天候でたちまち商売の売上げは影響を受ける。過剰人口、過剰労働力はインフォーマルセクター(→729)に滞留する。

863. ジャムウ売りの姉さん

数あるインドネシアの行商人の中でも一際目立つのが「ジャムウ売り(tukang jamu)」という薬を売る女性の行商人である。腰にサロン、上着にクバヤ(→781)というジャワの伝統衣装の女性が、ビン 5~6 本を容れた籠を背負い、手にバケツを持っている。ジャムウ売りは呼び声でなく民族衣装がトレードマークである。

客の症状や注文に応じて秘薬を水に溶かしてその場で処方する。蜂蜜や卵の黄身を加えたものを客は一気に飲み干す。おおよその得意先があるのでむやみやたらに歩き回っているわけではないが、街から街へ、あるいは村から村へ、優雅に滑るように歩いて行く。ただしインドネシアの優雅な歩き方とはガニマタではあるが。

伝統的な生薬であるジャムウは中部ジャワのスラカルタの王家(→131)に由来するという有難い薬である。ジャムウの売り子もスラカルタ周辺のスコハルジョ(Sukoharjo) 県の出身で一般に美人である。

ジャムウの本来の製造方法は秘伝であって母から娘一人だけに伝えられてきた。従って売手によって薬の調合は異なる。祈祷師のドクン(後述 866)は祈祷で病気を治す。この際、ドクンも色々のジャムウを作る。



ジャムウ売り ガンダリア
2011/7/07 編者撮影

最近ではジャムウも工場で大量生産されるようになった。「Nyonya Menyer」 「Sido Muncul」 「Air Mancur」 「Jam Jago」などが大手ジャムウのブランドである。これらのジャムウは市場に常設店を構えており、薬屋でも買える。しかしあでな姿の色気のあるネエさんが直売りともなれば効験もあらたかなのであろう。

種類豊富なジャムウは諸病に効く内服薬から外傷用、女性の健康増進薬、男性用の精力剤もある。病気の症状に応じて薬の調合も異なる。植物の葉や根が主原料であるところは漢方薬と共通する。最近、日本でも注目されているインドの伝統医療「アーユルベーダ (ayurveda)」とも関係あるらしい。ヨガやセラピーなどの一環である。

ジャムウの効果は近代科学的知識でも評価されるようになり、近代薬学による成分の研究が行われている。

ジャムウは薬としてばかりではなくお茶代りに飲むソフト・ドリンクもある。飲むと元気が出るらしい。成分に僅かながら含まれるアルコールがアルコール慣れしていないイスラム教徒には有効に効くのでなかろうか。日本のサラリーマンが通勤電車に乗る前にキオスクでビタミン剤を飲んでような気分であらう。

ところでジャムウの効用はまだである。女性には胸が大きくなるジャムウや痩せるジャムウがある。こういう話には目がない日本の女性にもジャムウ信奉者がいて、インドネシア出張者に買い付けを頼んでいる。お土産程度なら問題なからうが、余り多くを持ち帰ると日本の薬事法とかに触れるらしい。

インターネットでジャムウを検索していると“jamu stick”なる秘薬があった²。女性の然るべき場所に使用すれば男性が泣いて歓ぶ、とある。未使用につき評価は差し控えたい。

864. パサールの人々

村や町の中心に「パサール(pasar)」がある。パサールは市場であり、売る方も買う方も庶民である。バザールと語源は同じである。衣料品などの常設の店舗が核になっているが、そこに集まる商人はバクル(bakul)といわれる露天商である。多くは近郊農村の農婦が自家製の農産物を籠に入れて運んでくる。地面に籠を置くだけで客を待つ。朝が賑わい、午前中にはあらかた終わる。

市場の中心には簡単な建物かテントぐらいはある。何れにせよ雨あがりには泥んこである。周りの地面に勝手に商品を並べる。商品、乗り物などが入り乱れ、雑然さの醸し出す雰囲気には圧倒される。商品の間の迷路のような路地が続いている。

市場へ車で来る客もいる。駐車場の交通整理する人もいる。市場を管理する係員がバクルから場所代を徴収する。場所代は商品の籠の数によって決まる。

ジャカルタ最大のパサールは「タナ・アバン (Tanah Abang)」と「パサール・スネン (Pasar Senen)」である。18世紀頃から市が開かれ、町の中心の南下に伴い何度も火災にあいながら拡大してきた。

² <編者註>「tongkat Madura=マドウラの杖」と呼ばれている。

タナ・アバン³には市場の建物に入れない店を含めて 7000 軒の衣料店がひしめいている。パサール・スネンの意味は「月曜日」である。言葉どおり月曜日の定期市が発展して年中無休の常設市場になった。食料品が中心のジャカルタの胃袋である。

汚い、暗い、臭いが、しかし安いのがパサールである。為政者としては無秩序なパサールを見苦しいと思ひ、都会の若い世代は古いパサールから遠ざかる傾向にあり、パサールの改造が行われており、小さな町で立派な建物の一階が生鮮食料品、二階が雑貨・乾物というように整然としたパサールに出会うことがある。明るすぎる蛍光灯の光の下では野菜や果物の生鮮さが失われているように見えるのが不思議であった。

そのようなパサールは場所代が高くなり、場所代の安い所へ逃げてカキリマを開く。こうして設備の整った市場から弱小商人は淘汰されて次第に中国系商人だけになる。

大都会の住宅街ではスーパー形式の商店も増えている。しかしスーパーとは価格の交渉の余地のない高級品を売る店であり、お客も高額所得者に限られる。インドネシアのスーパーとは文字どおり“超高級”という意味である。大都会には「サークルK」というコンビニエンス・ストアも現れた。

「トコ(toko)」は一般の店のことで高価な物が売られる所である。例えば電気器具やバイクなどの工業製品である。トコで売られる食料品もあるが、kg 単位であるからその日の分しか買わない庶民には関係のない所である。トコの語源は中国語であり、チャイナ・タウンで見かけるショップ・ハウス(→798)という住み込み店舗が古典的トコである。

パサール・マラムは日暮れから始まる“夜市”である。イスラム教徒は断食期間中は日暮れとともに食事をすませると開放された気分ですっかり出だし、パサール・マラムが賑わう。バリでは観光客目当てに年中開かれているようだ。

865. プガメン/流し歌師

「プガメン(pengamen)」とは流しの歌うたいのことである。ギターを抱えて歌を歌いながら流す。1~2 人が組で歌い終われば金を受け取る帽子などを持ってまわる。払うお金は 100 ルピアから 500 ルピアの小額である。

日本でも夜の酒場にも見かけるが、インドネシアでは時間も場所もおかまいなく至る所にいる。人通りの多い街頭はいうに及ばず、自動車やバスの中でも営業する。狭いバスの中であれば聞かされる方は逃げようがない。信号待ちの車にさえプガメンが駆け寄る。

バタック人(→607)やアンボン人(→622)などは声量豊かで聞き惚れるような上手い歌もある。ジョグジャカルタのマリオボロ通り(→122)のプガメンは本格派である。そうでない下手な者でも商売になる。

客の好みにあわせてどんな歌でも歌える。一般に陽気な歌で日本の演歌のような暗い歌は少ない。日本人がいると分かれば『昂(すばる)』など日本の歌を始める。音楽を聞いたサービス代として何がしのお金が払われる。裕福そうな人に狙いをつけて取り囲み、金を払うまで何時までも演奏する。

インドネシア人は芸術的才能豊かであるからギターくらいの楽器は持っている。職につけない青年がとりあ

³2003 年 2 月タナ・アバンの 5500 軒の店が焼けた。トミー・ウィタナ(華人経営者)が再開発事業を計画していたので放火の疑いがあることを TEMPO 誌が報じたため、暴徒が TEMPO 誌社屋を襲撃した。スハルトが去ってもスハルト的手法は健在である。

えず始める仕事がプガメンである。TV に活躍し人気絶頂の歌手も元をたどればプガメン出身者もいるらしい。

日本映画のお馴染みの『寅さん』の職業はテキヤといわれ、独特の口上でもって客を集めて販売する。テキヤは香具師ともいわれる。香具師の語源は香または香の入れ物を販売する人のことである。香とは媚薬、秘薬に通じ、薬一般が商品であり、特に筑波山のガマ油が有名である。

さてインドネシアにも香具師がいる。口上のやりかた、蛇などの爬虫類を見世物にするなど日本とインドネシアに共通する民俗がある。インドネシアの香具師が見られるのはジャワ人ではなく、スラウェシ島など外島出身者であり、ブギス人(→615)やダヤク人(→624)らしい。ジャワ人の間延びした話し方はダラン(→874)向きであっても、きっぷの良い啖呵^{たんか}の求められる香具師向きではないのであろう。



ジャカルタ・クウィタンにて
2001/8/26 編者撮影

売り物は惚れ薬、媚薬の類である。トッケイ(→077)の唾液は催淫剤^{さいいんざい}であり、日本ならば“いもりの黒焼き”である。科学的な裏付けはつまびらかでなく、両棲類や爬虫類であることは性のシンボルとしてイメージ的なものであろう。

カリマンタンの森にはクカン?という体長 30cm くらいの夜行性の動物がいて雌雄の仲がよく、いつも一対で行動している。一方が死ぬと、片方も後を追って死んでしまう。このクカンの番いを生きたまま椰子油で煮る。そうしてできた油を身につけると夫婦の愛は死ぬまで続くという媚薬である。クカンという動物を調べたが分からない。香具師のデッチあげの動物らしい。ちなみに鱧^{わに}の油は

ガマの油と同じく万能の膏薬^{こうやく}である。

866. ドウクン/占い師

インドネシア人は迷信深い。この迷信深さによって成り立つ職業が祈祷師である「ドウクン(dukun)⁴」である。ドウクンはジャワ島にかぎらずインドネシア各地で社会的地位が高い。それなりの修練を積んだドウクンは精霊の使者として尊敬されており、病気⁵を治すドウクンから予言を行うドウクンまでいろいろである。産婆の仕事や割礼(→817)もドウクンが行う。

祈祷による病気の治療を行うドウクンは足の皮をつねったり、ひっぱたりして直す。治療薬として特製のジヤムウ(→863)も作る。近代医学の普及も徐々にとり替わって代りつつあるが、リウマチや脳溢血など現代医学で治療できない分野がある限り、インドネシアの大衆には今なお受け入れられている。

予言とかお告げを行うドウクンは大衆にかぎらず知識階級にも受け入れられている。大学の総長を務めたイワ・クスマ・スマントリ(→350)が自伝で幼児時代の経験としてドウクンが遺失物を見つけだした体験を自伝で述べている。

知人の日本人の庵浪人氏が盗まれた車をドウクンのお告げで発見した経験を真面目に語っている。度欲

⁴編者註>ドウクンは一般的な呼称で、地域、専用分野で別名がある。

⁵病気は人間に限らず車も病気になる。車の故障を祈祷で直すドウクンが道路沿いに看板を出しており結構はやっているという。

氏はドゥクンを尋ねその体験を科学的に解明しようとしている。

警察の犯人探しにもドゥクンが登場する。1996年ジョグジャカルタで新聞記者が殺される事件があった。迷宮入りになりそうなので最後の手段としてドゥクンが呼ばれた。被害者の血をジャワ海に捧げ真犯人を尋ねた。

ジャワのドゥクンは普通は男であるのは、「グル(guru)＝師」から弟子へ伝授は男女間の壁があるからである。よく当たるという評判のドゥクンの家の前は門前市をなす賑わいであるが、流行のドゥクンも昔ながらの汚い家に住み、汚いなりをしてテクテク歩く。今付いている霊が替ることを恐れているからである。ドゥクンが謝礼を気にするようになると霊力は低下する。

政府閣僚ともなるとお抱えの偉いドゥクンがいる。指導者のコンサルタントの役割も演じるが選挙ともなると精霊の力で相手候補を打ち破らねばならぬ。しかし、相手側にもドゥクンがついている。従ってドゥクンどうしの戦いになる。結局、勝者側のドゥクンの位が上という評価で決着する。例えば、スカルノ大統領からスハルト大統領への政権の移譲についても両方に各々のドゥクンがついており、そのドゥクン間の精霊を取り込む闘争においてスカルノ側のドゥクンが位負けしたと説明されている。

スハルト大統領のドゥクンではフマルダニ(Sudjono Humardhani 1919-)が名高い。軍人出身で大統領の側近となりインドネシアのラスプーチンといわれた。

偉い人のコンサルタントとして重要行事の日程はドゥクンが示唆するのでスケジュール調整が難しい。政府の建物の場所の選定もドゥクンのお告げによる。その結果どうも合理的でない所に立派な建物ができることもある。

⇒577.迷信深い

867. バリアン/祈祷師

バリ島の村々には一人や二人の「バリアン(balian)」といわれる人がいる。祈祷により病気治療を行う。あるいは占いとかまじないの呪術を職業とする人である。インドネシアの他の地域ではドゥクンといわれているが、バリでは呪術の生活密着度が一層高い。ドゥクンは宗教とは切り離されているが、バリ島のバリアンはヒンドゥー教の一環である。

バリアンとは病気治療を行う祈祷師であり、さらに呪術師でもある。バリでは両者は一体のものである。例えば出産の時に安産を祈る祈祷師として立ち会うが、生まれた子がどの先祖の生まれかわりを告げる呪術師でもある。

バリ人が信奉している死者と現世の人との間を仲介であるが、霊と人を取り持つためには神がかりのトランス(→576)になれる人である。バリアンはプマンク(次々項)という僧侶であることが多い。

例えば不治の病にかかるとバリ人はバリアンを訪ねる。バリ人は病の原因を次のように考える。先祖の寺院で祭りを怠っている寺院があって怒っている先祖の霊がいるに違いない。バリ人は多くの寺院に参っているが、世代が経過する間に忘れられている先祖が祀られている寺院があるかもしれない

バリアンはお客が捜し求める霊を呼び出す。先祖の霊はバリアンの口を通して最近の子孫から受ける待遇について不平不満を語る。このお告げで不当に怠ってきた霊の存在が判定する。後は日を選び寺院に供え物を持って参り、心から過怠を詫びれば病気も治り、一件落着である。

霊の言葉を一言も聞き逃さないように家族一同で耳を立てて聴く。バリアンは日常のバリ語と異なる格の高

いカウイ語(→909)で語るからである。口から出るのは霊の言葉でありバリアン自身にも馴染みのない言葉である。従ってバリアンの話した言葉を翻訳して解釈しなければならない。その際、テープレコーダーは有力な新兵器である。

約1時間で祈祷が終るとバリアンは正気に戻りお客と雑談をするが、霊の語ったことは覚えていない。バリアンは霊とお客の仲介人であるが、霊がバリアンの口を借りて勝手にしゃべりバリアンの思惑は一切ないからである。

一人のバリアンでは納得できなければ二人目、三人目と満足する答えが得られるまで原因追及を行う。この結果評判のよいバリアンはお客も多くなる。

お客は供え物を用意しバリアンには食料となりがしかのお金をお礼とする。報酬は形式的なものしか受け取らない。祈祷が金銭のためでないところに純粋性がありそうである。

日本でも死者との会話を取り次いでくれる人がいる。青森県恐山の地藏講に集まる“イタコ”が有名である。従って日本人にはバリアンの存在についてもそれほど違和感はない。しかし西欧人には信じられない事柄だけにやたらと難しい心理学の専門用語を使用して解説しているが、要はヒステリ現象という認識のようである。

868. 黒魔術師

モームが東南アジアに取材した短編小説の一つに「現地の女性と結婚したヨーロッパ人の男が女を捨てて帰国する。女は男に恨みをはらすため黒魔術を頼む。帰国途上の船中で男は原因不明の病気にかかり死ぬ」という主旨の話がある。

植民地体制下で白人は原住民を見下しながら、彼らの黒魔術を恐れていた。黒魔術は東南アジア各地にあり、日本にも深夜に神社に参り藁人形に五寸釘を打つ呪詛じゅそが存在した。インドネシアでは職業になっている。

ドクケンという祈祷師やバリアン(前項)という呪術師は“正業”であるのに対して、「フクムカルマ(Hukum karma)」という黒魔術師は裏社会の祈祷師である。欧米ではブラック・マジックという用語がある。

自分の好きな異性にライバルが現れるとそのライバルを蹴落とすために黒魔術師を訪れる。黒魔術師の呪力でライバルを病気に罹らせたりして災いを呼ぶ、場合によっては死亡させる。普通の黒魔術師の登場は色恋沙汰が多い。

黒魔術を使うのは卑劣な行為と考えられているが、もし黒魔術にかけられていることが分かった場合は白魔術で対抗しなければならず両者の壮絶な戦いが行われる。田舎の村長選挙でこじれると黒魔術同士の応酬戦になる。

魔術は誰でもが行えるものでなく素質と訓練の賜物である。ジャワ島ではバンテン(→115)、バニユワンギ(→150)が黒魔術の本場とされている。インドネシア全土ではセラム島のアルフル族(→226)の魔術が恐れられている。ちなみにセラム(seram)とはインドネシア語で「恐ろしい」という意味である。そのためか島名の表記が「Ceram」と変更されつつある。

バリ島では一族が同じ敷地で暮らしている。一見平和そうでも^{しつこく}権柄はある。遺産配分で氏族の^{やしう}社を引き継ぎ一族の代表となる者には手厚くし、その他の者も財産の配分はあるが恣意的であるため内部の^{かいつとう}葛藤は相

当なものらしい。その結果バリ島で黒魔術が盛んである。バリ島では黒魔術を左の呪術、白魔術を右の呪術という。

スハルト政権の崩壊直後の政治混乱の一つにバニュワング地方で殺害事件が相次いで発生した。犯人は黒覆面で正体不明のため日本の漫画にちなみ“ニンジャ集団”といわれた。犯人は隠れ共産党員による9月30日事件(→386)の復讐説などもあり、政治的背景は解明されないまま自然消滅したが、黒魔術師に対する魔女狩り説があった。

日本からの単身赴任氏が現地の女性と仲良くなり、任期が終われば女性を捨てて日本へ帰る。免疫のない日本人は黒魔術の策の弄するままになりそうであるが、冒頭のような事件はあまりない。その理由は黒魔術は感応する能力のある人にしか効かないからである。始めから黒魔術の存在すら知らない厚顔の人は大丈夫である。

ただし最近では全般に黒魔術の効きにくい環境になったという。その方の権威である度欲氏⁶の意見によれば電子機器の普及による電磁波汚染が最大の原因らしい。

⇒577.迷信深い

869. バリの司祭

バリ・ヒンドゥー教の最高祭司である「プダンダ(pedanda)」はブラフmana層の出身である。ブラフmana層の者以外はこの最高職に就くことはできない。プダンダはブラフmana層の世襲であるが、ブラフmana階級の者がすべてプダンダになるわけではない。

プダンダは特定の寺院を受け持たない。しかしブサキ寺院(→180)で催される重要な儀礼は神のような白装束のプダンダが高い位置に座して司る。その他の寺院の儀式ではプダンダがマントラ(mantra)を唱えることにより水は聖水になる。インド人がバリのヒンドゥー教に違和感を持つのはプダンダの権威にあるらしい。

寺院にはその寺院に所属する「プマンク(pemangku)」といわれる僧侶がいる。かれらは聖職者であるがブラフmana階級でなくてもよく通常は平民である。寺院を切り盛りしているプマンクは礼拝者に聖水をかけ、儀式の進行を取り持つ。

プダンダとプマンクは別者であり、一般にはプダンダを最高祭司、プマンクを僧侶、ブラフmana層を祭司階層としている。

かつて王国時代はプダンダが最高裁判官の役割を勤めたこともある。何れにせよプダンダの宗教的権威は国王の政治的権威の上位になる。あえてプダンダの権威に挑戦する者がいないのはヒンドゥー教という宗教に裏付けされた権威だからである。両者の関係は日本歴史における天皇と世俗の武士政権の関係に対応するものでチェツク・アンド・バランスである。

日常のプダンダは瞑想にふけり、教理を研究する。儀礼の細目や哲学や神話的な歴史といった神聖な知識を持つ。カウィ(古代ジャワ)語(→909)、サンスクリット語で書き写された知識の守護者であり、ロンタル(→045)の文書を管理している。プダンダは肉体労働をしないので爪を伸ばしている。世俗的なことにかかわりを持たない。儀式での立ち居振る舞いは威厳に満ちている。バリ島民はプダンダを厚く尊敬し崇める。プダンダはその尊敬と崇拝に応えなければならない。あらゆる場合にプダンダは高い位置を占めなければならない。

⁶ <編者註>度欲氏とはこの本の編者のペンネーム。

バリの祭りの写真でもカメラマンが高い所からプダンダを見下ろすようなものはないはずだ。もしあればバリ人は忌避するであろう。

戦前の外国人のバリ滞在記であるが、プダンダを二階建ての家に招待すると二階に誰もいないことを確認しないと家に入らない。車で用水路の下をトンネルで潜り抜ける際、プダンダは車から降りて土手を這い上り向こう側に降りたというエピソードが紹介されている。電線の下を通るのを嫌った。また頭上を飛ぶという飛行機の話にひどく不快感を示したという。今日ではこのような漫画的な光景は見られないだろうが、しかし考え方としてなくなったわけではない。

インドネシアの独立によってカースト制は禁止されたが、ヒンドゥー教が信仰されるかぎりプダンダはもとより、ブラフマナ層もプダンダを送り出す高貴な家系として尊敬されるであろう。⇒642.カースト制

870. ウラマとキヤイ

イスラム法典に精通した人が教育するのは許されるが、法典を教えることを職業としてはならない。イスラムで食を購うことをコーランの禁止している。キリスト教や仏教のような意味での聖職者はイスラム教にはいない。

キリスト教や仏教の腐敗はその教義ではなく、その宗門に携わる専門家、牧師、僧侶の悪徳によることが多かったという歴史的事実を考慮するとイスラム教は純粋かもしれない。その代わりにホメイニーやタリバンのドグマのもたらす弊害で世界は迷惑する。

イスラムの学問を修めた学識者、文化人を「ウラマ(ulama)」という。イスラムの法や神学に通じた人で宗教上の指導者である。西欧の科学文明の到来によりイスラムの伝統的学問を守護する立場から説教師、裁判官にもなる。ナフダトゥル・ウラマ(→419)は“ウラマの覚醒”という意味で伝統的立場をとるイスラム団体であり政治活動も行う。

「キヤイ(Kyai)」はジャワ語の「聖人」の意味である。インドネシア、しかもジャワだけの言葉である。ウラマもジャワではキヤイと呼ばれ、文化人、法学者である。イスラムでの老人、学識者への尊称である。国政に参加し大臣や大使になった人もいる。

第4代大統領になったワヒド大統領(→455)のフルネームは Abdurrahman Wahid キヤイ・ハジ・アウドウルラフマン・ワヒド(Kyai Haji Abdurrahman Wahid)がフルネームでキヤイの称号が最初につく。

キヤイは市井では結婚・財産の相談者である。プサントレン(→733)の先生はキヤイであり、生徒に対して絶対的な存在である。

「イمام(imam)」は宗教指導者であることの称号である。シーア派のイمامは別の意味があるが、スンニ派では礼拝の導師であり、モスクの維持管理を行うが職業ではない。アザーン(→809)の呼びかけもタイマー付きのテープの定時放送ではなく熱心なイمامが自発的に行う。喉自慢が行う奉仕活動である。

日本の寺院の本山の礼拝(創価学会は知らない)と比べるとモスリムのお祈りは整然としている。動作がマ스ゲームのように整然としているのはイمامがお祈りのリーダーがいて、ラジオ体操のようにそれにあわせる。ちなみに整然と並んでいるのは隣の人と肘をすりあわせて礼拝することが決められているからである。

「ハジ」はメッカ巡礼者(→816)に対する称号である。1回でも尊敬されるが、回数が多いほど尊敬される。余裕のある人は金を貯める代わりに何回もメッカ巡礼を行う。

インドネシアでは多くのイスラム関係者が宗教省の公務員になり宗教活動を行っている。宗教省の役人が

多いのは宗教行政よりもイスラム学校を経営しており、公立学校への宗教教育の先生を派遣する。教育については文部省と二重行政になっている。

スハルト体制ではイスラム関係者が公務員になってゴルカル(→393)に組織化された。スハルト大統領の失墜により、公務員という形でのイスラム教徒の体制への囲い込みがなくなったことがインドネシアのイスラムが先鋭的になってきた要因かもしれない。

871. 踊り子の修業

バリ人にとって舞踏は幼児の頃から生活の一部である。村の踊りの傍らでようやく歩きかけたばかりと見える幼児がガムラン(→911)の音色に併せて体を動かし舞踊のしなを作っているのを見るとバリ民族の舞踊才能の先天性を信じたくなる。



バリの村の女性ならば祭りには全員で神に舞踊を奉納せねばならない。しかしバリでも村代表のレゴンの踊り子となるのはこの中で選抜された者だけである。踊りの才能は当然であるが、容姿、美貌も関係はある。バリ美人の形容によればお月様のような丸顔でよく動く大きい目の女の子である。

選ばれた子供は親元を離れて寺院に合宿し、早朝の水浴に始まり連日連夜の厳しい訓練を受ける。足の置き方、動かし方、手の位置、構え方などの基本から体に叩き込まれる。目の動かし方のため、まばたきをしない練習、瞳を中央に寄せるのも訓練である。体を柔らかくするために苦痛なまでのマッサージを受ける。

訓練をへてきらびやかな衣装を着てレゴンを踊る。金製の冠やイヤリング、装身具はずっしりと重い。しかし踊りだすと何時間も踊っても疲れた様子はない。本人の意志とは別に神が体に乗り移り勝手に動くからである。

村を代表する踊り子であるから村人から大切にされる。村外に遠征する際も村人は歩く場合も踊り子は乗り物が用意される。不浄の土地との接触を避けるためである。車のない昔は男達の肩車で出かけた。よい踊り子は村の誇りである。

しかし彼女らは聖を保つために牛肉を食べることは許されない。また下着の乾してある下を通らないようにしなければならないなど生活面も規制が厳しい。

レゴンの踊り子は本来は初潮前の女子が望ましいが、厳密に適用すると現実問題として踊り子が欠乏する。しかし結婚すると神への奉納のレゴン舞踊はやめなければならない。このため踊りに没頭する者ほど婚期が遅くなる。

名手といわれる踊り子は観光客のためのホテルなどのショーダンスには踊らない。しかし一方ではプリアタン歌舞団(→997)のように海外公演に成功して世界的に名を知られた踊り子もいる。

踊りは名手といわれる人から弟子へと徒弟制の以心伝心で受け継がれてきた。しかし最近では学校制度が確立されている。そのためデンパサールには「コカール(Kokar)」という芸術学校と「STSI」という大学が伝統芸術の養成にあたっている。しかしこれによって奉納のための舞踊から職業のための舞踊になってきたという辛口の意見もある。

踊り子はバリ島だけでなくジャワ島にもいる。ジャワではジョグジャカルタやソロのクラトン(→121)で伝統の継承に励む選り抜きの踊り手である。一方、村々で庶民の娯楽のために余興で踊る踊り子である。ジャワの踊り子は分極化している。

⇒914.レゴン・女性舞踊

872. 鍛冶職人

「トゥカン(tukang)」はインドネシア語で「職人」の意味である。トゥカン・カユ(kayu=材木)は大工であり、トゥカン・バトゥ(batu=石)は石工である。その他にも何でもかんでもトゥカンをつけ例えば八百屋もトゥカン・サユール(sayur=野菜)という。

最もトゥカンらしいのは「トゥカン・ブシ(besi=鉄)」の「鍛冶屋」である。西部ジャワのスカブミ郊外チサアート(→515)にある農機具の鍛冶屋集落が健在である。

椰子の木をくりぬいた^{おんご}鞆、木炭や竹炭を燃料にしている。親方の合図で、数人の弟子が大きなハンマーで、回し打ちをしながら、巧みに鋏などを鍛造、造形していく。その鍛造技術⁷はなかなかのものである。

スラウェシ島の東南端のブトン島(→209)からフロレス海に連なる列島は「トゥカンブシ(Tukang besi=鍛冶屋)列島」といわれるように鍛冶屋が多い。その実態を調べるために、鶴見良之門下一行が船を借り切って訪れた紀行によれば、実際に今も鍛冶屋があったのはビノンコ(Binongko)島だけである。



ビノンコ島の山刀

ビノンコ島は「パラン(parang)」という山刀の産地であった。原料面からも市場面からも何故この辺鄙な島に鍛冶屋が多いのか分らない。珊瑚礁で土壌の生産性に乏しいためであろう。鍛冶屋が島の住民の伝統的生業になっているとしか言いようがない。

ところでパランは幅が広く厳めしい割りには切れない。小説にパランを振りかざしたマドゥラ人に追いかけられる場面があったが、多分にして威嚇用であろう。パランはクリス(→702)と異なり実用品であり、焼畑農民にとっては火付け前の柴刈り、播種後の雑草刈りの必需品である。魚をさばく包丁にもなる。用便をするためパランで土に穴を掘るという使いみちもあるらしい。

中部ジャワ州クラテン県トゥガルレジョ村のバトゥル、農業鍛冶から今日では鑄造工場が並ぶ。西部ジャワ州チウディ村は鉋、西部ジャワ州タシクマラヤ県ボジョン・ジェンコルは鋏などの金物の産地である。

インドネシアでは金属信仰(→701)と結びつき金属を扱う鍛冶師は神聖な存在であった。特にクリス製作は特殊集団を形成していた。鍛冶屋の呪い(→702)によって短命に終わったシンガサリ王朝の伝説は有名である。

鍛冶屋の身分の特権はバリ島に見られる。バリのカースト制社会はブラフマナを最高位とする階級社会である。しかし鍛冶職人だけはパンデ(Pande)と称して既存のカースト制の枠外である。鍛冶師は自らの寺院と僧侶を保持しており、プダнда(前述 869)からの聖水を受け取らないという特権が許容されている。

⁷西部ジャワの鍛冶で知られるスカブミでは日本刀が作られている。日本の占領中に軍刀を作ったのが始まりである。スカブミ産の日本刀はバリ島の観光土産に“サムライ”という商品名で売られている。

日本で農機具といえば、高度成長の前は鋤や鍬などのことであつたが、今日では耕運機が使用され田植も稲刈りも機械が主流になった。インドネシアでは鎌や鋤などは現役の農具であり、鍛冶屋は普通の社会生活をしている。しかし鍛冶屋にはマイスタジンガー的な犯し難い雰囲気があるのでなかろうか。

873. 伝統工芸職人

伝統工芸品の最たるものはクリス(→935)である。今日でもクリスの製作には暦で仕事開始の日を決め、断食を行ってから作業にかかり、炉にお供えをして無事完成を祈る。出来上がったクリスにエンプ(empu=工匠)は呪文をとこなえる。日本刀の制作も似たような状況で作られている。衣装も神主と見間違ふばかりであり、まさかジーパンを着ていないはずである。しかし日本刀は死せる文化財である、クリスは生きている文化財であることが両者の相違である。

インドネシア各地に伝統工芸品が多いように伝統工芸品職人も各地にいる。その中でもバティック職人・ワヤン職人などの伝統工芸職人はジョグジャカルタ(→120)やスラカルタ(→130)の古都周辺に多い。



ワヤン(→904)人形の製作は職人の手作業による。いい人形の製作には何年も乾燥した水牛の皮が利用される。疥癬にかかった水牛の皮がよいらしい。その皮をステンシルで切り取り髪型や衣装は彫金のようにていねいに刻みこむ。仕上げは彩色には金箔も使用される。精魂を込めて作られたワヤンはプサカ(→704)である。

ボール紙をきりぬいても影絵になるにもかかわらず、丁寧な制作は奇異である。やはりこのような精魂を傾けた制作は影への敬意と畏怖であろうか。

ワヤンの製作では中部ジャワのウオノギリにあるマニヤラン(Manyaran)村が知られている。マニヤラン村出身のダラン(次項)も多い。村では分業になっており村民が工程の一部を担当している。村長が全工程を差配する。土産物店のワヤンはとにかく、影絵芝居を行うため本物のワヤンは注文生産である。

ジョグジャカルタのコタグデ(→123)は銀細工の店が軒を並べている。ジョグジャ観光で旅行社任せにすれば勝手に連れていかれる所である。かつて王室のための銀細工師が居住していた名残の地である。工房の見学があるが、呆れるばかりの細かな細工である。微風でも材料の銀が散るため無風の滲むような汗の中で職人が作業をしている。

ガムラン(→910)の製作は注文生産である。一編成で一式百万円を超えるため前払いを要求される。ゴングという金属製の打楽器が主楽器であるが、ガムラン一式の素材は、竹・木・アシ・皮革・金属と多岐にわたる。

工程は完全分業である。全体を取り仕切るのは素材の費用や職人の賃金を立て替えることのできる資金のある者である。ジョグジャカルタにガムラン通りは何か関係があるのだろうか。

ジョグジャカルタのクラトン(→121)周辺の民家のある路地では木の下で老婆が手描きバティックを描いていた。編み物でもする感じで一人静かに作業していた。すぐ近くに店があり商品らしきバティックが陳列してあった。老婆は実演による観光客寄せの看板代わりであることにしばらくして気がついた。伝統工芸の作業場を写したビデオを見ていると京都か金沢の路地の奥で仕事に励む職人の様子を思い出した。

874. ダラン/ワヤン語り

ワヤン・クリットという影絵芝居の人形の操り手は「ダラン(dalang)」という。ダランは人形を操りながら語りも行う。上演の際は同時にガムラン(→911)という伝統楽器の楽団の指揮も行う。クチュレクという楽器はダランが自ら足で蹴って鳴らす。その外にブシンデンという女性の歌い手もいてダランの指示に従う。

このようにワヤンは八面六臂^{はちめんろっぴ}のダランによって演じられるいわばワンマンショーである。ワヤンの出来いかんはひとえにダランに負うことになる。有名なダランのワヤンとなれば遠方から人も集まり客の入がよくなる。

夜8時すぎから始まるワヤンの上演は朝まで続く。深夜になると観衆もガムランの楽員も適当に居眠りしているが、ダランが眠るわけにはいかない。飲食はおろか便所へさえ立てない。ダランとは肉体的のみならず、厳しい精神力の持ち主でなければならない。

ワヤンはおおまかな筋はあるが本番はダランでは即興がかなり取り入れられる。同じダランでも古典的格調の高いものに強いダランもいれば、時事的話題に強いダランもいるというように夫々得意分野は異なる。

影絵というのは人形が激しく動くのは戦闘の場面くらいでほとんどは人形は静止したままである。ワヤンを見るものでなく聞くものである。観客はダランの語りを楽しむ。スルック(suluk)という謡うような語りもある。著名なダランはテープが販売されている。

かつてイスラム教がジャワに導入された際、イスラム教の普及にダランが果たした役割は大きい。現在のダランもその時々^の社会問題に絡めて時事問題の解説もできる教養人であり、時代を先取りする知識人である。有識者であるから村の指導者として村民に対する影響力も大きい。ダランはジャワ文化の正当な教育者の役割をも果たしている。敬語の複雑なジャワ語(→633)はジャワ人にも複雑で難しい言語である。

9月30日事件(→384)以降、共産党関係者は徹底的迫害を受けた。共産党員のみならず同調者も公職から追放され、禁じられている職業にジャーナリスト、教師などとともにダランも含まれていることはダランの民衆への影響力の大きさを物語るものである。事実、多くのダランがパージされたといわれる。

かつてダランは子供の時から親を見真似ながらなる世襲の職業であったが、最近ではジョグジャカルタにダランになるための養成所がある。基礎教育を終えてからさらにダランに弟子入りして実地に学ぶ。

ジャワ人のあこがれであり誰もが一度はやってみたいのがダランである。クラトン(→121)では王家の後継者が座興に人形を操つこともある。

スカルノ大統領がダランを演じている写真が残っている。スカルノ大統領の演説がうまかったのは聴衆の反応を見ながらアドリブや間の取り方など巧みであったからである。まさにこれはダランのテクニクである。

⇒905.ワヤンの上演

875. エビ冷凍工場の女工

ジャカルタ国際空港は首都の西郊外になる。飛行場から都心まではたんたんとした一本道を走る。両側とも池になっている。これらはかつてのマングローブであったところが切り開かれてエビの養殖池になったものである。この風景はジャワ島からスラウェシ島など外島の海岸各地に広がった。

もともとインドネシアで行われていたミルク・フィッシュの養殖に替わって稚エビが池に放たれ、時期がくれ

ばエビは大きく育った。乾季に製塩、雨季に養魚という粗放的自然養殖の農業的生産であった。しかし台湾で開発された集約養殖技術がインドネシアに導入されるにつれエビ養殖の効率はよくなった。

エビの養殖池の近くに近代的な冷凍工場が忽然として現われる。コールド・チェーンといわれる冷凍技術の確立がエビ養殖業の前提である。一定期間養殖池で大きくなったエビは近辺の養殖池からエビ冷凍工場に集荷される。

冷凍工場へは 10 時間以上かけて運ばれることもある。このため道路が整備され貨物車が増えたという。冷凍工場の立地条件は陸上交通の便と輸出のための港湾条件、エビを水につけたまま氷らせるため清潔な水が得られるところである。

鮮度や大きさでエビを等級に分ける。そろいの帽子、エプロンをつけ選別、箱詰めは女性の仕事である。輸出先の日本人の潔癖症候群に振り回されている。その割には養殖池で使用されている薬品は見逃されている。

大きいエビは殻つきのまま頭と尻尾を整然と揃える。見栄えがよくなる。中くらいのものは頭を切り落として頭なしでそろえる。頭部分が腐りやすいからである。無頭の方が冷凍の効率からもよい。小さなものはムキエビにしてカップラーメンに使用する。それぞれの大きさに対応した最大限有効利用である。水とともに冷凍する。女工の一日の賃金は 2～3 百円と日本のパートの1時間の半分にも満たない。しかし工場の外にはエビの頭を落とすだけというさらに底辺の労働がある。

乾季には池が干上がるのでエビの集荷時期は乾季前に集中する。冷凍工場も年間フル生産ではないので季節労働である。生鮮品であるので入荷すると直ちに処理されねばならない。ロスタイムがしばしば生じる。

冷凍工場は大手水産会社と総合商社の提携による開発輸入方式である。パッカーといわれる集荷人が養殖者から買付ける。輸出先の多くは日本である。

エビは高級魚として経済力でもって日本など外国へ流れる。日本人だけがエビが好きなのではない。かつては自ら食していた熱帯の住民は今日ではサンバルやトゥラン(→765)という子エビの加工食品しか食べていない。

マングローブというかけがえのない貴重な自然生態を破壊してエビ養殖池を拓きインドネシア人の安い労働力に支えられて今日も日本人が鱈腹エビを食っている。

⇒553. 養殖エビ

fs876. カー通勤ジョッキー

インドネシアの経済発展を象徴するのは首都ジャカルタのタムリン通(→160)とそれに連なるスディルマン通である。高層ビルの林立する片側5車線の道路はインドネシア紹介のテレビに必ず出てくるシーンである。問題は都心と南の郊外を結ぶ交通手段がこの幹線道路しかないことである。

従って庶民の足のバスと通勤の自家用車が朝の時間帯にこの幹線に殺到する。その結果、起きるのが交通渋滞である。バンコックほどでないにしても車の増加に道路が追い付かない。そこで当局は自家用車に目をつけ、1992年に午前6時30分から10時まで運転手をいれて三人以上でない車の都心乗り入れを禁止した。

いわゆる“スリーインワン(3in1)”⁸は1台の車に3人(運転手を含む)という意味である。今まで2台に分乗し

⁸ <編者註>1992年から実施されたこのルールは2016年5月16日に3in1は廃止された。

ていた人が1台に乗り合わせにすれば通勤車は半減するはずである。当局としては乗合で来ることによって車の数が減ることを期待したものである。2003年12月からは夕方(4時~7時)も実施されることになった。

事実、規制を逃れるため始業時間を6時30分に繰り上げた会社もある。当初の間は車が減り、1時間かかったものが30分になるという著しい成果が上がった。

しかし朝はとにかく帰りも乗合にすることはビジネスマンとしては不自由である。そこで奥方を同乗して出勤となるが、奥方も毎日用もないのに亭主の出勤に都心まで付合うのは面倒である。次に出てきたアイデアはメイドが主人と一緒に通勤する。メイドは喜んでついてくるがその分だけ家事が滞る。

次に登場したのは“ジョッキー(jockey)”である。検問の手前の道路に並んで通勤車に合図を送る。見ず知らずの大人を同乗させるのはインドネシア人の運転手も怖いから、子供のアルバイトである。身軽に車に乗り込み検問個所を過ぎると降りる。3000ルピアが相場(2004年)である。

ジョッキーとは日本語では騎手のことである。言葉の感覚に違和感があるので英和辞典で調べると騎手以外に暴利をむさぼる人とか若者という意味もある。ジョッキーという流行語は3in1の制度と同時にシンガポールから導入されたい。

子供も頭数であるが格好がみすぼらしいと不自然である。乗せる方も目つきの悪いのや汚いのは困る。規制時間内に3回程度の同乗は可能かもしれない。

こうして名案と思われた3in1作戦も職のない者の無駄な移動を増やただけで実効を欠きラッシュ・アワーの混雑状況も改善されていない。罰金が100万ルピアと高くなったのでジョッキーへのニーズが余計に増した。

シンガポールでは車番号の奇数か偶数で規制している。ジャカルタでも新たな対策が必要であるが、偉い人が困るような対策は採られるはずがない。

インドネシアではどんなことでも商売のタネになる。また独創的なことを始めてもすぐ真似する人が現れる。3in1は交通対策というよりは社会福祉対策のようである。

877. 空港の公務員

インドネシアに到着して最初に接するのは空港の出入国管理と税関の役人である。手続きを容易にするために彼等は「ハディア hadiah (贈物)」を受けるのが当然と思っていた。日本人は「オミヤゲ」と露骨に催促された。事前にパスポートにドル紙幣を挟んでおくのが手続きをスムーズに行うために便法であった。

空港に限らず外国人に税関の評判が悪いので、政府は1985年以来、通関業務をSGSというスイスの民間会社に委託した。現場の職員がインドネシアの公務員であることに変わりはないが、通関に伴う悪弊は改善されたい。空港税関の旅行者の荷物検査の改革に伴い出入国管理も改善された。仕事の行われる場所もかつての暗い電灯は怪しげな雰囲気醸し出していたが、蛍光灯で明るくなったのも改善策であろう。

それでは空港での問題が完全になくなったのかと言えばそうではないらしい。例えば入国の際に入国カードを渡さないで入国させる。普通の旅行者はパスポートを返してもらえば入国カードを確かめずにやれやれとばかり通過する。

しかし数日後、出国の際には入国カードがないため出国の際にトラブルが発生する。旅行者が縷々説明をすれば「別室へ来い」ということになる。そこで特別の便宜のための料金が示唆される。入国の際の担当者

と出国の際の担当者は別人である。両方の連携プレーであり、収入は部署全体のものになり、手当のような形で配分される。汚職であるが、彼らには給料が少ないことに起因するゴトンロヨン(→593)程度の認識である。

この被害に遭うのは日本人が多いのは欧米人は理屈の通らない金は拒否するが、日本人は金ですむことに固執⁹しないからである。

1983 年以来、観光客誘致のため観光目的の入国はビザが要らなくなったことがある。商用でインドネシアへ出かける人はビザが要る。しかし頻繁に往来するビジネスマンはビザが面倒なので観光で入国する。出入国の役人なら観光か商用かを見分ける嗅覚^{きゆうかく}を持っている。ビジネスマンも油断すれば「別室へ来い」ということになる。

以上はインドネシア経験の多い人に語り伝えられている話であり、日常的に発生しているわけではない。著者自身の十数回インドネシアへ出張した際には同行者同伴のケースが多かったので幸いにして直接に経験したことがない。しかしいかにもありそうな雰囲気は実感できたのであえて記載した。

空港の公務員は観光であれ、滞在であれ、インドネシアで接する最初のインドネシア人であるだけに、そのビヘイビアーはインドネシアの印象を決定づけるものとなる。日本人ならば外国人にたかることは日本の恥だという意識があり、日本での外国人に対する犯罪のブレーキになっている。ところがインドネシア人は相手が異教徒であれば天の恵みのふんだくるチャンスと思っているのだろうか。インドネシアに長期に滞在すれば、郵便局(→857)や警官(→900)などあらゆる公務員にゆずられることは免れ得ない。

⇒749.汚職の風土

878. チャロ/便利屋

インドネシア駐在員にとってもっと厄介なのは滞在許可書の取得である。ビザ、就業許可までは各国共通であるが、インドネシアではその他に関係官庁は入国管理局、労働省、警察、国家情報調整本部 BAKIN にわたる。駐在員の必要な許認可は①STM 居住登録(居住地の警察)、②STMD 外国人登録、③KITAS 滞在許可、④SKLD 州警察への住居登録、⑤MERP Multi Visa 出入国証、⑥IKTA 労働許可である。

6種類の届け出が必要であり、その有効期限は半年～1年である。まともに届け出の作成だけで滞在期間の半分が過ぎる。取得、更新の料金以外のコミッションが必要であるが、蛇の道は蛇にしか分からないので非効率この上ない。

プングリ(→749)をあからさまに要求される。いろいろトラブルが発生すれば賄賂がないと前向きに進まない。最もよい対策はインドネシア人にやってもらうことである。

よくしたものでこれらの届け出の代行を行う「チャロ(calor)」という便利屋がいる。手数料は必要であるが煩わしさから解放される。雇用増加に寄与するし不愉快なことも少なくなる。商社など大きな事務所ではエージェントとの名目で専属のチャロを抱えている。賄賂への協賛であるが、スピードマネーというインドネシア経費

⁹空港のイミグレで金持ちの日本人から金をせびるために何のかんのと文句をつけられた時の対応策は個人個人のノウハウがある。その一つに「孤児院に定期的に寄付をしている」との一言が効くらしい。イスラム教徒にとって金持ちは貧乏人に施す義務があるわけであるから金持ちの日本人からせびるとは疾しいことではない。喜捨の義務を果たしている人にまでたかるわけではない。

空港の公務員の標的は外国人や外国企業ばかりでなく、インドネシア人も免れない。インドネシアからの出稼ぎ労働者のために第3ターミナルがあり、外国への出稼ぎから帰ったインドネシア人は空港公務員から身ぐるみ剥れるような収奪を受けるらしい。

である。

代行業者は駐在員の届け出以外に会社の労働許可、住宅の契約、車の購入、運転免許証、家の修理・貸借、メイドや運転手の手配、チケットの購入も行う。税金用の書類、保険用の書類も整えてくれる。

例えばSIM(運転免許書)の取得に代行業者と一緒にいくと、最優先に事務手続をしてくれる。写真と指紋の代行はないのでそれだけは本人がやる。数十万ルピアはかかるが、所要期日は1日である。試験は形式だけである。インドネシアの運転が乱暴なのは金さえあれば免許がとれるシステムにもある。

長距離バス乗り場には多方面へのバスが交錯しており乗り場に迷いそうな所には必ずチャロがいる。夜の銀座で店の名前を言えばどんなややこしい場所でも連れて行ってくれる商売があった。今もあるだろうか。インフォーマル・セクター(→729)の就業者が多いことはあらゆるサービスが業務として成り立っている。

別に代行屋を利用するのは外国人だけではない。運転免許の更新で警察へ行けば玄関の所で代行屋が何の手続きか尋ねる。字を書けない人もいるし、書類というのはややこしくできているから代書を兼ねて頼む。

インドネシア人は列を作って並ぶのが苦手であるから、役所の窓口で群がっている。一つ書類の処理を終わると一斉に書類が突き出される。担当者は気まぐれに一つの書類を受け取る。代行屋がいれば先に受け取る。

日本にもよく考えると裁判所や法務局の近くに司法書士の事務所があり、税務署の近くに税理士に事務所がある。彼らの行う代書業務はインドネシアのチャロと替わらないが、料金が妥当か否かであろう。

879. ビーチボーイ

バリ島のクタ・ビーチ(→173)はサービス業のアイデア競争でもある。ビーチで体をやっているとTシャツなどの土産物ばかりでなくいろいろなサービスの売手が現われる。オイル・マッサージを全身に塗ることを専門にするオバサンがビーチを徘徊している。芸術家の素質のある民族であるからマッサージの具合もいろいろいい。マニキュア塗り専門もあるらしい。髪の毛を三つ編みにしてくれるというのものもある。ビーチボーイといわれる若い男も客を捜し求めて徘徊している。さてバリ島のビーチボーイとは。

バリ空港の出発ロビーではバリの男と日本の女が別れを惜んでいるシーンは珍しくもない。観光客の日本女性は『旅情』のベニス駅のキャサリン・ヘップバーンになりきっている。女はハイミスの独身女性であり、男はビーチボーイである。

ビーチボーイはバリ人と思いがちであるが、必ずしもそうでないらしい。バリの観光ブームをあてにしてバリに出稼ぎに来たジャワ人が多い。

そもそのきっかけは空港の到着ロビーにビーチボーイが待ち構えていて達者な日本語で声をかける。空港でなくてもクタのビーチに一人でおれば次々とビーチボーイがやってくる。暇つぶしになんとはなしに相手になる。そのうち女性が気にいれば滞在の間、女性へのサービスにこれ務めることになる。

ボートやサーフィンの手配や手伝いが本来の仕事であるが、その業務範囲はマッサージなどにも及ぶ、さらにエスカレートもして行くところまで行く。バリのビーチボーイは日本の高級とり独身女性の遊び相手として職業化するに至った。女性の方も満足してまた翌年といわずにやってくる。彼らの営業手段から“タクシーボーイ”とも言うそうである。

このような日本女性を数名キープしてかち合わないよううまくスケジュールを調整するのがビーチ・ボーイ

の手腕である。無心の手紙を出せば送金もしてくるようになるとビーチボーイは優雅に暮らせる。しかし女性の方は自分だけと思っているから他に女がいることが判れば騒動が起きる。

空港で帰りの飛行機に乗らずバリ島に居ついた女性もいる。中年の未亡人の場合は一つの生き方として共感の余地もあるが、中にはパスポートも取り上げられて現地の男のヒモを養っているのもいる。こういうことがないようにと日本女性の宿泊しそうなホテルに領事館の名で掲示してあるのは面倒を見きれないからであろう。

日本でも職業を持つ女性がふえ彼女らは結婚しなくなった。しかし彼女らも時として憂さばらしが必要である。そういう時はバリに出かける。日本の女性週刊誌が「バリへ男を買いに行こう」と煽った。山田詠美著『熱帯安楽椅子』はビーチボーイとの関係が文学にまでなったものである。

かつて東南アジアにはカラユキさん(→347)という日本人の売春婦がいた。しかし時代の流れで今や日本女性は売る方から買う方へ立場は逆転した。日本の女性諸君に詰問すれば男連中がバンコックでやっていることと同じだ、と開き直るであろう。

880. バリ農民の一日

早寝早起きのバリ人の一日は日の出前に始まる。水浴をすませて食事する。バリでは食事の際に話すことはタブーであり、家族と一緒に食事をする習慣がない。従って御飯は炊いておけば各自が勝手に台所のすみで食べる。家族の誰かと一緒にの時もお互いに背を向けて食べる。食事の行為は排尿や排便と同じような位置づけらしい。

食事が終わると男は田に出かける。水田耕作は田植えと刈り入れ時期を除くとそう忙しいわけではないので午前中くらいに仕事をすませる。農作業は男の分担である。女は刈り入れの時は手伝う。

商売は家畜のような多額なものを除くと女性の分担である。農婦が自家の農産物を市場(パサール)に持ち込み店を広げる。市場の生鮮食料品は商品の一籠に 100 ルピア程度の税金を払えば誰でも売り子になれる。市場は未明から始まり昼には終わる。

バリ人では男女の仕事の分担が明確でお互いに干渉をしない。日常の料理は女性であるが、神様への供え物の料理は男が行う。男があればほど熱中する闘鶏(→832)にも女性は驚くほど無関心である。文化も分担システムらしい。

バリの寺院の近辺にはバレ・バンジャールという集会場がある。祭りの準備の相談という名目はあるが、常時、男共が集まって無駄話をする所である。村の男は閑な時間はそこですごさねばならない。バンジャールの付き合いの中では集団主義の村の掟おきては個人主義を許容しない。

昼寝して再び水浴しそれからはレジャーとカルチャーの時間である。ガムラン(→911)の練習も宵の内である。遅くとも9時までには就寝する。夜は魍魎ちみもうりようが横行する闇の世界である。そのかわり祭りの時は全員が夜更かしをする。

バリ人は召集信号であるクルクルの音が聞こえるところに住む。仮に村を離れてもオダラン(→645)には帰郷せねばならない。生まれたところで死に村人に葬式をしてもらうのが彼らの信条である。仮にバンジャールの拘束が嫌いでつきあいの悪いバリ人がおれば、その人が亡くなって葬式には明らかな手抜きが行われる。日本の“村八分”よりはるかに厳しい制裁である。

バリ島を紹介する旅行記は人気が高い。1930年代、40年代の欧米の芸術家の滞在記(→977)はバリ人の生活を伝えている。これらの著作はユートピアを語るがごときである。社会学者のギアツ(→978)の調査でもこの傾向は窺われる。

日本のテレビ放送でも最近バリ島の取材番組がある。そこでは島民の生活もユートピア的に描かれているのが定番である。例えばケチャダンス(→915)のリズムに合わせて稲の収穫を行っているようなのはヤラセすぎであろう。

現実のバリ人もまたこの世の住人であるから個人間の確執もある。遺産相続争いから同じ屋敷に居住する身内を黒魔術師(→868)に病気で倒れるように頼むというようなことは珍しくもないという。⇒595.バリの村落

881. ゴム園労務者

1920年代のプランテーションによるゴムブームに沸くマレー半島やスマトラ島でのネックは労働力であった。英国の植民地のマレー半島ではインドや中国からの出稼労働者でまかなった。スマトラ島はオランダ領東インド内であったためジャワ人がクーリーとしてスマトラ島に移住してきた。

『ゴム園』の著者 Medelon Lulops の著書(→972)に『クーリー』がある。スマトラのゴム園のクーリーになるジャワの男の一生である。貧しいジャワの農村から旨い話に釣られて前払金を目の前にして訳のわからないまま契約してクーリーになる。荷物同様の扱いでスマトラ島に連れてこられて苦難の年月が始まる。

クーリーと白人は別世界の人間である。クーリーでも中国人¹⁰とジャワ人の宿舎は分けてある。本人の体力と金銭意欲との関係であるが、ジャングルの開拓のような厳しい肉体労働は中国人、ゴム液採取のような平易な労働はジャワ人という大まかな傾向はあった。

クーリーの間には女の取り合いの民族憎悪からリンチで殺される事件もある。二週に一度の給料日に無け無しの給料は博打^{ばくち}か女に消える。

ようやく当初の契約期間3年を終了するが、わずかの貯金では恥ずかしくて故郷に帰れない。従ってまた18ヶ月の契約を続ける。何回も更新する間に古参となり年功序列で商品としては償却済みの古びた女をあてがわれ同棲する。

やがて故郷で田畑を買えるだけの金を貯めてジャワに帰る決心をして準備をする。しかしふと魔がさしたように昔馴染みの賭場に近づき、結局は所持金の総てを失う。そして19回目の更改で初老の歳になった彼が再びジャワ島に戻れることは絶望的である。

植民地時代のクーリーは人の扱いを受けなかった。農園からクーリーが裁判に連れてこられる。雑役係が同行している。クーリーは一列に整列し裁判官は順番に「1ヶ月」「2ヶ月」「3ヶ月」「4ヶ月」の懲役の判決を申し渡す。5人目からまた「1ヶ月」「2ヶ月」と繰り返す。農園主が雑役係も帰らないので調べるとクーリーと一緒に並んでいたのが懲役を命じられて監獄にいた。この話はオランダの植民地統治の非人道性の例としてハッタ(→443)が自叙伝に記している。

インドネシア独立後の今日では植民地時代の欧米資本のゴム農園の多くは没収されて国営もしくは軍の財団の所有になった。天然ゴムの価格の低迷でゴム農園の経営はかつてのような魅力的な事業でなくなっ

¹⁰ 編者註)北スマトラのメダンに広東省出身者が多いのは、19世紀後半にたばこ農園の労働者を募集したのが広東と深いつながりがあったペナン島のエージェントであったからである。Tjong A Fie 記念館の説明書から。

ている。気の利いた農園ではゴムの樹の寿命を機会にあぶら椰子(→562)に植え替えられた。

取り残されたゴム農園もある。そこで行われるゴム採取とは成木の幹に傷をつけ、受け皿を付着し、数時間後に採取された液を回収する。機械化の余地のない単純作業であるため賃金も低い。ゴム園の経営主体は変わってもゴム採取労働者は底辺労働として植民地時代とたいして変わらない。

⇒561.天然ゴム

882. 焼畑農耕民

熱帯雨林破壊の責任問題に関連して先進国への木材輸出のための森林伐採もさることながら、先住民の焼畑耕作も同程度の破壊をもたらしているとの指摘がある。インドネシアでは焼畑は原則的に禁止されているが、スマトラ島やカリマンタン島など外島の先住民による焼畑農業は今なお続けられている。

近年のインドネシアの森林火災(→742)は国際的な煙害をもたらしており、その犯人に焼畑があげられている。

先住民の焼畑の昔ながらの方法は乾季の終りに森林を伐採して乾燥させ、雨季の直前に火がつけられる。焼かれるのはかつての焼畑の再生林であり、人の手つかずの原始林ではない。根まで焼かれるわけではないから樹木はやがて萌芽を吹き出す。

数年使用して地味が衰えると休ませて次の区画に順番に移っていく移動式農業でもある。パッチ状の区画をサイクルで繰り返し使うが、焼畑農耕民の人口増加で農地面積が不足するとサイクルが早くなり地味が衰えていき、アランアラン草(→741)が生え、永久に放棄される現象も生じている。

森林の焼かれた跡に先の尖った棒で地面に穴を突刺してそこに陸稻^{おかぼ}などの種を蒔く。数ヶ月後、灰を肥料にして陸稻などの穀物が実る。農具としての棒はお粗末にみえる。しかし鍬のような土を掘り起こす道具で耕さないことがかえって表土の保全になっている。特に傾斜面での土の流失を防いでいる。アワ、キビ、オカボ、モロコシなどいろいろな作物を混栽することで病虫害のリスクを小さくしている。

焼畑農耕は猪や鹿など野生動物との戦いである。これらの動物は焼畑にとって害獣であるが、狩猟を行えば蛋白源でもある。イスラム教徒に猪は“バビフータン(森の豚)”であるからタブーである。焼畑農耕民が多分にしてキリスト教徒である理由は猪の狩猟を止めるわけにいかないからであろう。

焼畑は気のきいた農機具も肥料も農薬を使用しないので極めて効率の悪い原始的農業に見える。しかし生態系に合った合理的な有機農業であるといえる。しかし焼畑民族は辺境の少数民族であるため政治発言力はなく、森林火災の冤罪^{えんざい}まで押し付けられている。

一方、プランテーションも森林を焼き払って開拓する。そこでは地味は徹底的に奪いとられる。従って一度使用された土は容易なことでは復活しない。肥料と農薬で荒らされては次々に移動拡大して新たな森林が伐採されていくため森林破壊を伴う。

森林火災が問題になると、今後、規制が厳しくなることを見越して今のうち焼いておくと森林放火に拍車がかかったとか、焼くためにガソリンまで使用するとか、とかくボブハッサン(→681)のような農園開発事業者には黒い噂が絶えなかった。

昔ながらの方法による自給自足の焼畑と牧場や農園を拓くための森林放火とは区別しなければならない。しかし焼畑農耕民の現状は近代化、市場経済化の波に飲み込まれ、残る生計手段は森林伐採あるいは農

園の作業員というのが実態らしい。

883. 海峡の人・海賊

インドネシア語で「オラン・スラト(orang selat)」の直訳は「海峡の人」の意味で転じて熟語になると「海賊」の意味になる。海峡があればマングローブや岩の陰から海賊が現われたことがこの熟語の語源であろう。

世界の交通の要所で何時の時代も絶えたことはなかった海賊は現在も健在である。マラッカ海峡は航行の難所で船のスピードは落ちている。満船になると舷の低くなるタンカーに小舟で近づき鉤を引っ掛けてよじ登る。タンカーは船体の割に乗組員が少ないから発見されにくい。

特に日本船は法律で武器を所持できないことが知られているので最も狙われやすい。武器はよじ登ってくる海賊にヤカンの湯をかけるくらいである。海賊といっても現金や電気器具を入手すればおとなしく退散し、危害を加える意図はない。一種の“私設関所”のようなものである。コンドロのでアジア型の海賊であった。

貧乏なイスラム教徒の軒先を金持ちの異教徒が挨拶もなしに通るならば、何か置いていけというのはイスラム教徒の権利であり義務であるとの程度の意識である。イスラム教徒に海賊稼業が多いのは海賊を悪とする規範がないからであろう。

しかしながらマラッカ海峡の海賊は次第に凶悪化し、武装した連中が停泊中または航行中の船舶を襲い積荷や装備品にいたるまで強奪するようになった。海賊は“海峡の人”ではなく中国系シンジケート組織に操られているといわれる。背広を着た海賊といわれる。船員拉致による身代金要求も増えてきた。件数もさることながら船員の殺害されるケースが増えており海賊の凶暴化が懸念されている。

1999年10月にアサハン(→542)からアルミ塊7千トン日本向けに積載した貨物船アロンドラ・レインボー号が海賊に襲撃されて乗組員全員がボートで海に放り出され船が丸ごと乗っ取られるというシージャック事件があった。外国籍であるが日本人船長が乗る日本の船会社の船舶である。

シージャックは船の強奪のみならず、強奪船の操船、積荷の売却、船の偽装などを組織的に行うためシンジケートが関与している。マラッカ海峡の古典的海賊では手におえるはずがない。せいぜい強奪時の下請けの頭数^{あたまかず}くらいである。

マラッカ海峡を含むインドネシアの海域は無法地帯である。世界の海賊事件の1/3はインドネシア海域といわれる。海賊の横行にはインドネシア海軍がつるんでいるとの噂も絶えない。アチェ独立運動(→436)が盛んな頃はその資金稼ぎともいわれた。何れにせよインドネシア国家の威厳の低下もある。

冷戦時代は米国海軍の東南アジアでの存在は抑止効果があった。関係諸国の取締りの強化が望まれるが、被害国の言い方が難しい。インドネシア・マレーシアに見れば自分の家の軒先を巨大タンカーの通行で何のメリットもなく、油濁のリスクをかかえ迷惑している。ゴテゴテ文句があるならば通るな、といわれればそれまでであるからである。

884. 零細漁民

2002年9月、ジャカルタの漁港で漁民が寄航していたタイの漁船を焼き討ちにする事件があった。インド

ネシアの漁民は10トン以下の漁船で操業しているが、タイの漁船は30トンが船団を組み、トロール漁法ですべての魚を搔っ攫って水揚げするためインドネシア漁民のやむにやまれない実力行使であった。

トロール漁法は禁止されているが、海軍の摘発はないのは海軍の軍人の給料も少ないからといえそこから先は検討がつく。インドネシアの沿岸を外国の漁船への反発はインドネシアにも鮮魚を供給するようやぐ本格的な漁民が現れた証拠である。

ジャカルタの海辺に近いムアラバルに漁民が住み着いている。昔からの魚民の町ではなく、ジャカルタにも鮮魚需要が増してきたためインドネシア各地から漁民が移住してきたものである。漁民はブギス人(→615)やジャワ沿岸各地、マドゥラ島、スマトラ南部からの移住者である。都市住民への鮮魚供給は比較的新しい商売である。

伝統のないインドネシアの漁業はささやかであった。インドネシアの食文化は海魚を食べない文化であった。大規模消費が見込めず流通機構もない所での漁業は半農半漁であり、漁法の進歩もなかった。海に囲まれていた日本では海岸に小船を係留できるような浦があれば、漁業を営む漁村がある。同じ海に囲まれているインドネシアの海岸ぞいに漁村をみかけることはあるが、戸数は少なくいじましい存在であった。《オランパンタイ(海辺の人)》は《オラングヌン(山の人)》から差別されているらしい。

その原因は海賊が跋扈して拉致されるとか、津波が恐いので海岸に住まないなど理由もあるが、最大の原因は熱帯では魚が早く腐るので商品にならなかったからである。それでも漁業は庶民の貴重なタンパク質性食料の供給源で、子魚やエビをついて粉にして練って塩付けにしたトゥラシ(→765)はインドネシア人の食卓の必需品である。冷蔵技術の進歩により鮮魚の商品化が可能になった。

バリ島の早朝のリゾート・ホテルの浜辺には観光客もいない。海に三角網を拡げては操り寄せ魚の稚魚を取っている漁民の姿を見ることができる。しばらく見ているが採れる様子はない。趣味でないようであるが、職業というよりは自宅の食卓のおかず目当て程度としか見えない。

農地に乏しい外島のほうが漁業は進んでいた。しかし伝統漁業の規模は小さくせいぜい珊瑚礁の中で夜に灯油ランプで魚を集める程度である。東インドネシアで行われている伝統漁業にルンポン(lumpon)という浮漁礁とつくり、夜、集魚灯をつけてそこに集まってくる魚をまき網で採る漁法がある。ルンポンには小屋があり寝泊りできる。ウォーレシアの深海ではルンポンを高度にしたパヤオ(payao)でマグロやカツオを漁獲する。

最近は電気やダイマナイトを使用する違法漁法がインドネシアで絶えないことが新聞に報じられる。伝統的漁業がない所では略奪漁法がまかりとおるようである。⇒769.魚はイカン